

# セルフ・ヘルプ・グループの Empowerment 機能に関する研究

—精神障害回復者クラブとそのメンバーの Empowerment に関する評定研究—

三島 一郎 (大東文化大学文学部)

## Empowerment Evaluation in Self-Help Groups Practice for People with Recovery from Mental Disorders

Ichiro MISHIMA

### はじめに

本研究は、筆者の博士学位論文（三島,1999）の抄録である。セルフ・ヘルプ・グループ（以下、SHGs と略す）の理論研究、評定研究、事例的検討の三本柱の研究の成果より、SHGs の Empowerment 機能を浮き彫りにすることを目的とするものである。特に、Empowerment 機能の評定研究は、当時（1999 年時）、SHGs 研究の中で最初の研究であった。

SHGs とは、ある共通の問題に見舞われた個人（あるいは家族）が、自分一人だけでは解決できそうにないその自分自身の抱える問題の解決のために、あるいは、その問題と共に生きていく力を得ていくために、自発的かつ意図的に組織化したグループである。このグループは、たとえ協力関係はあっても、専門職からは独立し、自主的・自律的に運営され、持続的に定期的活動を行っている（Katz & Bender,1976; 岡知史,1988）。

この定義づけをさらにシステムの変化の側面から述べると、SHGs は安定した永続的なコミュニティの機能を持つひとつのシステムであり、システムの変化を通じて、個人は、自己のシステムに変化を生じさせる。その変化は、認知、行動、情動の各側面で相互促進的に生じ、それまでマイナスイメージでしか見ることでできなかった自己像が解体し、問題や問題を抱えた自己像の新たな見方の獲得（自己の解放と、自己の回復）と、その新たな自己像を支えるイデオロギーの普及や、それを通じての様々な形や様々なレベルでの社会変革を促す動きへと連なっていく。それは、正にメンバーが、SHGs への参加を通じて力を得ていく（自らを Empowerment していく）過程であり、さらには、サービスのあり方やその位置づけを変えたり、新たなパラダイムや社会を創造していく為の大きな可能性を含んだ力強い歩みであると位置づけられる（三島,1997a）。

Empowerment は、コミュニティ心理学の中では、個人、グループ、コミュニティの 3 層にわたり、

自らの生活に統制(感)を持つことと規定されている(Zimmerman,1985a,1985b)。より具体的には、Segal,Silverman,Temkin(1993)は、SHGs活動が、個人・組織・対社会的レベルの3層にわたり、単に感覚レベルにとどまらず、メンバーが必要な資源を獲得するのを援助すること、対処能力を開発するのを援助すること、メンバーの自己概念を引き上げる方法を提供すること、精神障害者と認定されることに伴うスティグマを減じさせること、組織内における管理・運営・サービスの配分に関する統括をメンバーに任せること、社会政策の立案にメンバーが参加するのを促進すること等を通じて、Empowermentを、実際的な力の獲得として実現させようとしていると見ている。

Empowermentは、SHGsの独自の機能の中核を成す機能である。理論研究においても、Empowermentの概念を導入することによって、それまでと全くバラバラに論じられがちであったSHGsの機能に関する議論が、ある一定の統合性をもって相互に位置づけられた。

しかし、1999年の段階では、Empowermentの理論研究が先行していて、EmpowermentがSHGsの中で実際のところどのように展開されているのかの評定研究がなされていなかった。

そこで学位論文では、SHGsの持つ、Empowermentの機能の評定研究を試みた。

1999年時点では、SHGsの評定研究は、医療モデルや心理療法モデルによる評定研究であり、それは、SHGsに参加することでもたらされる成果を評価するという点では意味があったが、SHGsの本来の効果を評定しているとは言えなかった。

学位論文は、SHGsの中核の機能であるEmpowerment機能の評定尺度を作成し評価を行い、さらにその効果の評定を行った点で、SHGs研究の中で1999年時点において、最初の研究である。

Empowermentの評定研究の対象としては、精神障害回復者クラブを取り上げた。その理由は、精神障害をめぐって、日本の状況の中で、一般的に社会的価値の引き下げの問題が観察されるであろうことと、それだけに、この領域のSHGsは、戦略的にEmpowermentの問題に切実に取り組んでいるであろうことが予想されたからである。

方法としては、1995年にSHGs『つどい』で行ったアンケートの回答(「出会いの中で」第3号,1997)から質問項目を起し、「セルフ・ヘルプ・グループの持つEmpowerment能力評定尺度」(以下、Empowerment能力評定尺度と略す)を開発し、メンバーのグループに対する評価と、Segal,Silverman,Temkin(1995)が開発したEmpowerment獲得評定尺度(Empowermentスケール)によるメンバーのEmpowermentの間の相関を検討した。その作業を通じて、1999年時点で手付かずであった、SHGsのEmpowermentを生み出す能力を評定する尺度の開発に当たると共に、量的研究によって、経験的に言われてきているSHGsの持つEmpowerment能力を実証的に検証した。

結果として、Empowerment能力評定尺度は、次元性が高く、内的整合性の極めて高い尺度であることが明らかとなった。また、Empowerment獲得評定尺度(Empowermentスケール)との間にも正の相関が見られ、特にグループレベルのEmpowermentと最も強い相関のあることが検証された。これらの結果より、SHGsのEmpowerment能力が実証的に裏付けられたと共に、今回開発された尺度が、SHGsの持つEmpowerment能力を評定するのにふさわしいものであることが明らかにされた。

さらに、事例検討によって、日本の精神障害回復者クラブを取り巻く様々な文化を扱った。それらの知見から、個々の SHGs のイデオロギーが、グループ相互の対話や交流を阻んでいる側面、専門職が関与することのマイナスの側面、1999 年時点の日本の状況の中で、精神障害者が、コミュニティレベルでの Empowerment を獲得するのが、かなり難しい状況が明らかになった。

本研究から、新たな研究と実践の展望を得た。

ひとつは、Empowerment に関する尺度開発による道具立ての整備を得た所での、コミュニティ心理学独自の Empowerment アプローチの可能性である。Data ベースド・アプローチを通じたコンサルテーションが展開できる可能性がある。それは、従来言われている「エンパワーメント・アプローチ」のように漠然としたものではなく、しかも本研究で明らかになった専門職の関与のマイナス面を最小に抑え、当事者の独自の力を大事にしながら、グループやメンバーの Empowerment に寄与し得る道である。

もうひとつは、主成分分析の結果より、Empowerment 能力評定尺度は一次元性の高い尺度であることが分かったが、Empowerment 能力を構成する要素が抽出される可能性が否定された訳ではなく、今後の Empowerment 評定研究の可能性と方向性を得たことである。更なる研究によって、SHGs の Empowerment 能力を構成する要素がいくつか抽出される可能性がある。その結果は、理論研究にも大きなインパクトを与えるだろう。

## 研究の目的と意義

SHGs を「ある共通の問題に見舞われた個人が（あるいは、その家族が）、自分一人だけでは解決できそうにないその自分の抱える問題の解決のために、あるいは、その問題と共に生きていく力を得ていく為に、自発的かつ意図的に組織したグループである」と定義した（三島,1999）。

さらにこのグループは、たとえ協力関係はあっても、専門職からは独立し、自主的・自発的に運営され、持続的に定期的活動を行っているグループであり、従来の援助モデルに見られる様に、援助の方向が専門職から被援助者に一方的に固定され、「患者であること」「消費者であること」を、被援助者たちが専門職との関係の中で強制されてきた専門職中心のヒューマン・サービスの在り方に変更を求め、全く新しい当事者（被援助者）中心のヒューマン・サービスの在り方を再構成していく可能性を持ったグループ活動と考えている（三島,1999）。

その意味で、SHGs 活動とその機能を考えることは、21 世紀のヒューマン・サービスを展望することになり、同時に新たな当事者と専門職との関係を模索していくことにつながる、と筆者は考える（三島,1999）。

本研究の目的は、SHGs の独自の機能の一つである Empowerment について、精神障害回復者クラブとそのメンバーを対象に、評定研究を行うことである。ここで言う独自の機能の一つである Empowerment とは「個人・組織・コミュニティの 3 層にわたり、自らの生活に統制（コントロール）と意味を見出すことで力を獲得するプロセスである」と定義し（Zimmerman,1985a,1985b）、個人・

組織・コミュニティの3層にわたり相互促進的に発展するもので、①個人レベルでは、無力な状態から、認知・行動・情動面に変化を生じ、生活に統制と意味を見出すことで実現され、②組織レベルでは、コミュニティ感覚(sense of community)がグループの中で形成されていくことで発現し、③コミュニティレベルでは、対社会的にも影響を与える運動を展開していくことで実現され得る、と考える(Zimmerman,1985a,1985b)。

また、精神障害回復者クラブとそのメンバーを評定の対象としたのは、精神障害をめぐって、日本の状況の中で、一般的に社会的価値の引き下げの問題が観察されるであろうことと、それだけに、この領域のSHGsは、戦略的にEmpowermentの問題に切実に取り組んでいるであろうことが予想されたからである。

本研究の進め方は、まずSHGsの機能に関する文献研究を行なって、SHGsの機能について理論的な整理を行ない、EmpowermentがSHGsの中心的機能であることを確認し、それを評定することの意味を明確にする。次に、SHGsの持つ一つの機能であるEmpowermentの評定を行う。評定研究の第1研究では、精神障害回復者クラブのメンバーが、どのように自らのSHGsの体験を意味づけているのかを抽出する。第2研究では、第1研究で得られたメンバーの体験の記述そのものの中から、SHGsの持つEmpowerment能力評定尺度を開発する。第3研究では、Segal,Silverman,Temkin(1995)が開発した、重篤な精神障害を持つメンバーにより運営されるSHGsへの参加の効果としてのEmpowerment獲得評定尺度(Empowermentスケール)の日本語版を作成する。第4研究では、第2、第3研究で開発された尺度を用いて、SHGsのメンバーの体験的能力感と実際のEmpowermentの獲得の関係を検討する。さらに、第2研究で得られた量的データに事例研究で得た質的研究も併せて、SHGsがEmpowermentを獲得するための条件を考察する。

## 1. SHGsの機能の研究

SHGsの機能についての論議を先行研究からまとめた(三島,1998a)。代表的な機能として、①グループ・プロセス、②イデオロギー、③ヘルパー・セラピー原則、④体験的知識、⑤専門的援助に対する批判的役割、⑥グループ・ダイナミクス、⑦Empowerment(力の獲得)を挙げた(三島,1999)。

その中で、とりわけSHGsの機能の中心にEmpowerment機能を据える理由としては、社会的価値の引き下げによってpowerがそがれていることが観察されるグループのメンバーが、具体的に生きていく力をSHGsの活動の中で獲得していくことが中心的な活動の眼目となっているからであり、それ故、EmpowermentをSHGsの機能の中心に据えることは、SHGsの機能の中核を扱うことになるかと筆者は考える(三島,1999)。

このEmpowermentは、個人・組織・コミュニティの3層にわたり、自らの生活に統制(コントロール)と意味を見出すことで、力を獲得するプロセスである(三島,1999)。

各レベルでの力の獲得内容を見てみると、①個人レベルでは、統制、生活に意味を見出す、必要

な資源の獲得、対処能力の開発、自己概念の向上、体験的知識の利用、自己説得のプロセス、新たな自己・新たなアイデンティティの獲得、自己効力感の向上、自らに働きかける行動力の強化、自尊心の向上であり、②組織レベルでは、統制、コミュニティ感覚の形成、必要な資源の獲得、対処能力の開発、メンバーの自己概念を引き上げる方法の提供、スティグマの軽減、組織内における管理・運営・サービスの分配に関する統括をメンバーに任せる、モデリング、統制に役立つ新たなヒントを得る場の獲得、体験的知識の交換、自己説得のプロセス、新たな自己像・新たなアイデンティティの獲得に対するグループによる追認、自らと環境に働きかけるメンバーの行動を強化、援助役割の獲得、好んで帰属し得るような仲間集団の獲得、グループ文化の形成、相互支援の展開、援助資源の増大であり、③コミュニティレベルでは、統制、対社会的に影響を与える運動の展開、必要な資源の獲得、対処能力の開発、スティグマの軽減、社会政策の立案にメンバーが参加するのを促進する、環境や社会に働きかけるメンバーの行動を強化＝社会変革者、仲間への権利擁護のためにグループの文化を社会に代替的な文化（オルタナティブ）として提供しヒューマン・サービスの再編を訴える力ともなること、相互支援の展開、援助資源の増大である。このような力の獲得が SHGs の機能として存在しているのではないかと、理論的考察から提言できる（三島,1999;Zimmerman,1985a,1985b）。

## 2. 精神障害回復者クラブ及びメンバーの Empowerment に関する評定研究

まず、第1研究において、SHGsのメンバーがグループに参加することにより何を体験しているのか、そして、その体験をどのように認知しているのかを抽出した。1.の理論研究から、Empowermentの定義づけが、それを獲得する個人によって大きく異なることが明らかにされたので、メンバーのグループ内での体験とそれをどう認知しているかを聞くことにした。

方法としては、筆者も関わっている一つの精神障害回復者クラブの全会員36名にアンケートを送り、22名より回答を得た。回収率は63%であった。結果については、これまでのSHGsの機能研究の成果を踏まえ、カテゴリー分けを行った。最終的な活動の意味付けは、精神障害回復者クラブのプロジェクト委員の座談会での話し合いを経て行われた。その結果、2つの重要な要素が浮かび上がってきた。一つが、モデリングであり、もう一つが、他者の役に立つ体験—傷つき体験・喪失体験が他者の役に立つ、ということであった。

モデリングによって、仲間から成功への生きた見本を示し続けられることによって、メンバーは、グループのイデオロギーと同化するようになり、それを通じて問題への統制を獲得する。そのことで、自己像と問題への捉え方が修正され、新たなアイデンティティの獲得と、自尊心の向上がもたらされる。今や、グループの中でメンバーは、援助者であり、社会へも働きかける主体である（三島,1999）。

また、援助者としての役割を果たすことは、メンバーに、社会的に役に立っているという感覚を呼び起こす。同時に、ある種のコントロールと、何かを成し得る能力があるという感覚が得られる

ことで、Empowermentの構成に貢献する過程である。特に重要なのは、援助の与え手と受け手が共通の問題を抱えており、そのことから生じる深いレベルで実感を伴う共感と内的理解が、援助を特に効果的にさせるのである(傷つき体験・喪失体験が、他者の役に立つ)。そのことによって、スティグマによって限定されることなく、自らを積極的に受け入れることが可能となり、メンバーの自尊心が高まり、援助を受ける能力も増すのである。援助される人々自身が、援助の担い手となることで、問題を持つことが、他者の問題解決の一部となる。このことは、対象となる問題の把握をより確実にし、自尊心を築き上げ、相互関係を活性化することにもつながり、やがて援助が自己増殖的に展開し始める(コミュニティのEmpowerment)条件ともなる(三島,1999)。

この調査研究は、「つどい」が研究主体であることが何よりも大きな特徴である。当然のことながら、研究の計画・立案、実施、評価の全プロセスにメンバーが関与することとなる。こうしたあり方は、SHGsの研究モデルのあり方のひとつを提示することにもつながるし、研究者や専門職のSHGsへの関わりのモデルの提示にもなると考える。

この研究のプロセスそのものが、当事者自身が、問題がそのまま成長・解決につながることを意識化するプロセスでもあった。従来は、こうしたことは、専門家から一方的に規定されていた。当事者自身は、専門職との関係の中で、事実上、こうしたことを意識化する機会を取り上げられてしまっていたと言える。

それでは、当事者たちは、こうした知恵を意識する機会を、専門職から奪われ続けたままなのであるか。専門職との関わりがない所で、どのように意識化してきたのだろうか。

そのことを考える時に、重要な概念として、「体験的知識」(Borkman,1976)というものがある。体験的知識とは、ある体験に見舞われ、身体・精神を含めてその人の全体が巻き込まれ、しかも、その体験の中を生き抜く過程を通じて獲得される。体験的知識は、そうした意味でのその体験への全体的参加なしには、決して得られないという点で、絶対的な意味をもつ。SHGsの中では、様々なメンバーが参加することによって、多種多様な体験的知識が交換され、個々のメンバーはそれらの中から、自らの役に立ちそうなものを自らの役に立つ形で選択的に利用するようになる。SHGs活動は、体験的知識によって、自らの生活をコントロールし得るという体験を積み重ね、自分には「力がある(Empowerment)」という感覚を高めることで、問題を抱える内部者(insider)の視点から、専門職に役割変更を求め、ヒューマン・サービスを再編し、構造的変革を求める勢力のひとつとして位置付けられる(三島,1999)。

今までサービスの受け手としてしか認知されなかった当事者が、体験的知識を基盤として、サービスの担い手としても機能することによって、コミュニティの援助資源が爆発的に増大し、コミュニティの治癒力が高まり、コミュニティのEmpowermentへとつながる(三島,1999)。

第2研究は、第1研究のアンケート調査で得られたメンバーの体験に基づき、そこからSHGsのEmpowerment能力評定尺度を開発することを目的にした。方法としては、メンバーの体験の記述の中から、筆者のSHGsの機能に関する理論的研究の成果をも参考にし、SHGsのEmpowerment

機能に関わりがあると思われるものを全てピックアップして、70項目抽出した。項目は、その意味内容が明確になるよう若干の表現上の修正を行った。さらに、SHGsの機能研究の成果から、筆者が必要と考える項目を若干加えた。これらの項目が、SHGsのEmpowerment能力を評定するものとして、内容的にどれだけ妥当であるかについて、SHGsの研究者・実践家・活動家4名に評定を依頼した。評定に際しては、「妥当である」に3点、「やや問題がある」に2点、「妥当でない」に1点という具合に配点してもらった。最終的に、評定者4名中3名以上が3点を配点した項目だけを内容的妥当性のある項目として、採用した。結果として、30項目が採用された。その内容は、「モデリング」(3項目)、「体験の共有」(5項目)、「ヘルパー・セラピー原則」(2項目)、「リフレミング」(7項目)、「サポートネットワークの獲得」(10項目)、「体験的知識の交換」(3項目)であった。

SHGsの持つEmpowerment能力評定尺度項目の筆者による暫定的なカテゴリー分類は、以下の通りである。なお、項目の頭にある番号は、実際の尺度に採用した際の項目番号である。各項目は便宜上、それぞれ以下のように命名した。

#### モデリング (3項目)

5. メンバーの自己決定する姿を見ることで助けられた = 「決定観察」
16. 仲間の工夫を聞くことが、生きていく上での力となった = 「工夫探知」
23. 自分ばかりが苦しんだのではないことを知り、新たな勇氣と力が与えられていく = 「他者情報」

#### 体験の共有 (5項目)

6. グループでは、あなたの体験を語ることが十分に認められている = 「体験吐露」
17. 同病者の集まりであることが、グループの魅力である = 「近似」
24. 休める場所である = 「休息」
28. 誰にでも話せない病気や薬、病院の話ができることで支えられている = 「特殊テーマ」
30. メンバーの間だと、病気であったことを意識しないでつきあえる = 「平静交流」

#### ヘルパー・セラピー原則 (2項目)

7. グループでは、あなたが援助役割をとる場面がある = 「援助役割」
18. グループの中で、何らかの役割を果たす場が保障されている = 「役割保障」

#### リフレミング (7項目)

8. 体験を分かち合える関係が生まれることで心の傷が受容できるようになった = 「心傷受容」
9. 病気であることや、病気を抱える自分に対するイメージが大きく変化した。それらを意味あるもの、自分を支え生かしていくものと捉え直すことができた = 「イメージ変」
19. 病気を自覚した = 「病理自覚」
25. 病気の持つ分かり難さ、深刻さも感じた = 「深刻理解」
29. 自分に自信がついてきた = 「自信獲得」
31. 病気を受け入れられるようになり、それが色々な活動のバネになっている = 「病理受容」
33. 自分の内にもあった偏見や無理解にも気づくようになった = 「偏見理解」

### サポートネットワークの獲得(10項目)

10. 具体的に便宜を図ってもらえたり、力を貸してもらえらる = 「便宜受理」
11. 孤独感から助けられた = 「孤独解除」
12. 生きる方向を考える基礎となる人間関係が得られた = 「人間関係」
13. 当事者側から見た、精神医療の現状の最新の情報が得られる = 「情報」
20. 問題を前向きに考える勇気が湧いた = 「勇気」
21. 話すことで、支えられたり、支えたりをしている = 「会話」
26. 精神的な支えを得た = 「心的支え」
27. 仲間として互いに尊重し合っている = 「相互尊重」
32. 互いに元気であることを確認してうれしくなる = 「元気確認」
34. 信頼できる先輩や仲間と出会えたことが何よりの財産である = 「邂逅」

### 体験的知識の交換(3項目)

14. 問題行動をコントロールすることについてのアドバイスが得られる = 「アドバイス」
15. 具体的な対処の仕方が示され、日常生活の中での具体的な指針が得られる = 「指針」
22. 問題や悩みについて理解するための枠組みが得られる = 「枠組獲得」

この Empowerment 能力評定尺度と関連項目(媒介変数)として、性別、年齢、グループへの参加期間、グループの開催頻度、グループへの参加頻度、グループのあなたにとっての重要度を訊く質問紙を用意し、都内の14の精神障害回復者クラブのメンバー104名を対象に調査を実施した。有効調査対象数は100名であった。

結果としては、Empowerment 能力評定尺度について主成分分析を行ったところ、負荷量平方和における分散の割合は、第1因子で36.4%であり、第2因子5.8%、第3因子5.5%、第4因子5.1%で、第5因子以後は5%以下となり、この尺度は次元性の高いものであると判断した。また内的整合性を確認するために Chronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、.935であった。平行モデルによる信頼係数は .936 であり、信頼度は十分高いことが確認された。

第3研究は、Segal, Silverman, Temkin (1995) が開発し、重篤な精神障害を持つメンバーにより運営される SHGs への参加の効果を見るものとして作成された Empowerment 獲得評定尺度(Empowerment スケール)の日本語版を作成し、その内的妥当性、尺度としての信頼度を検討する。

Segal, Silverman, Temkin (1995) は、Empowerment 獲得評定尺度の開発に当たって、Empowerment の個人レベルでの分析を行うが、単にパーソナリティの側面だけでなく、個人とその個人の参加する社会構造との関わりも変数として扱った。さらに、SHGs への参加者の日常生活に Empowerment がどのように現れるかが考慮された。

研究グループは、自己効力感(self-efficacy)や自尊心(self-esteem)、希望(hope)、統制感(locus of control)を、Empowerment の下位概念としてではなく、相互に関連する重要な変数として採用



した。Dodd,P.,&Gutierrez,L. (1990) の Empowerment の概念を援用し、Empowerment の個人的側面を、個々の生活を構成し統制する能力として規定し、日々の生活の選択の幅と不確実性を低減できる度合いで算定しようとした。

次に組織的に引き出される Empowerment については、グループ内におけるメンバーの権威と責任の増大の影響として見ようとしている。

コミュニティのレベルの Empowerment は、メンバーがグループ外の政治的あるいはコミュニティの活動に関与しているかどうかを見る。

以上3つの側面から、メンバーの Empowerment を SHGs の Empowerment の効果として評定することとなる。

日本語版の作成に当たっては、Segal,Silverman,Temkin (1995) の Empowerment 獲得評定尺度を翻訳することから着手し、翻訳に当たっては、米国留学経験のある研究者に、協力を依頼した。翻訳されてきた尺度を、筆者ともう一人の SHGs の研究者とで検討し、明らかに翻訳の間違っている部分の手直し、表現の明確化・平易化も同時に図った。Segal,Silverman,Temkin (1995) の Empowerment 獲得評定尺度 (Empowerment スケール) は、個人レベル、組織レベル、コミュニティレベルの3層にわたって Empowerment を獲得したかを評定できるようになっている。

開発された日本語版 Empowerment 獲得評定尺度の項目の実際については、詳細は、三島 (1999) を参照して欲しいが、以下に概略を挙げておく。

#### 【個人的な力の獲得】

##### 自 由

以下のことについて、あなたはどのくらい決める権利がありますか？ (1. 全然権利はない、2. あまり権利はない、3. 少しは権利がある、4. すぐく権利がある、9. 回答不能)

1. 自由な時間をどのように過ごすか決める権利
2. お金を持っている時に、それを何に使うか決める権利
3. テレビやラジオで何を見る (聞く) か決める権利
4. 困った時にどこに相談するか決める権利
5. どの地方に住むか決める権利
6. どこで暮らすか (アパート、マンション、施設など) 決める権利
7. 家にお客さん呼びたくなった時に、それができる権利
8. 困ったことがあったら、いつ相談するか決める権利
9. 自分の物をどこにしまうか決める権利
10. あなたの家に夜、誰を泊めるか、あるいは泊めないかを決める権利

##### 機 会

以下のものについての確実性をお答えください (5.100%,4.75%,3.50%,2.25%,1.0%,9. 回答不能)

11. 来月の生活費が手に入る可能性
12. 来月の生活 (どのように過ごすか) についての確実性 (見通しはどのくらいですか)

13. 来月、趣味や娯楽のためのお金が十分に手に入る可能性
14. 来月、食事や住居や衣類などの必需品のためのお金が十分に手に入る可能性
15. 来月、十分な食料を手に入れる可能性
16. 来月の住む所を確保する可能性
17. 来月の住居が安全であることの確実性
18. 来月、必要なものを奪われてしまう可能性
19. 来月、肉体的に傷つけられる可能性
20. 今日の友人が来月も友人である可能性

**【組織の仲介による力の獲得】**

これから過去半年の間にあなたがグループや組織で行ったかも知れない事のリストを読み上げます。自助グループや病院、保健所、職場、学校、教会など、あらゆるグループや組織について考えてください。(もし答えが「はい」なら名前を聞き出し、全て記入する事)

**組織**：1. 自助グループ、2. 病院：デイ(ナイト)ケア、3. 保健所、4. 職場(自助グループを除く)、  
5. 学校、6. 教会、7. その他(名前を全て記入)

**参加**(9. 回答不能, 1. はい, 0. いいえ)

1. あなたは、ある組織のメンバーになりましたか?あるいは既にメンバーですか? (「いいえ」なら4.へ)
2. あなたは、その組織の役員選挙で投票をしましたか?
3. あなたは、その組織の役員になった事がありますか?

**自由**(9. 回答不能、1. はい、0. いいえ)

4. あなたは自分で、ミーティングを招集した事がありますか?
5. あなたは、ある組織で食事を準備したり飲み物を用意する役を果たした事がありますか?
6. あなたは、ある組織でボランティアを定期的に行っていますか?
7. あなたは、その組織で有給のスタッフになった事がありますか?
8. あなたは、話し合いを進行したり、その進行を助けたりした事がありますか?

**決定**(9. 回答不能, 1. はい, 0. いいえ)

9. あなたは、どんな活動をするかの決定に参加した事がありますか?
10. あなたは、新しいプログラムやサービスを追加するかどうかの決定に参加した事がありますか?
11. あなたは、誰かを雇うかどうかの決定に参加した事がありますか?
12. あなたは、スタッフの給料の決定に参加した事がありますか?
13. あなたは、サービスやプログラムに幾ら費用をかけるかの決定に参加した事がありますか?
14. あなたは、グループがどの位の頻度で集まるかの決定に参加した事がありますか?
15. あなたは、グループの規則の決定に参加した事がありますか?
16. あなたは、もし誰かが規則を破った時どうするか決定に参加した事がありますか?
17. あなたは組織の変更や改善について、組織を運営する人に提案した事がありますか?

### 【組織外の力の獲得】

過去1年間にあなたが行ったかも知れない活動について伺います。それぞれについて、あなたが過去1年間にその活動を行ったかどうかお答え下さい (1. はい, 0. いいえ, 9. 回答不能)。

1.

- a. 高校や大学で皆に体験談を語ったり、講演や講義をしたりしましたか？
- b. 新聞や雑誌への投稿文を書いたり、書くのを誰かに手伝ってもらったりしましたか？
- c. 新聞や雑誌の編集者に意見書を書いたり、書くのを誰かに手伝ってもらったりしましたか？
- d. 地域や国の会議に参加しましたか？ (もし、「いいえ」なら fへ)
- e. その会議では発言しましたか？
- f. 政治活動に参加しましたか？
- g. 役所や政治家に手紙を書いたり電話したりしましたか？
- h. 役所や政治の会議に参加しましたか？ (もし、「いいえ」なら jへ)
- i. その会議では発言しましたか？
- j. 政府の会議や委員会に参加しましたか？ (もし、「いいえ」なら lへ)
- k. そこで発言しましたか？
- l. 政府の会議や委員会に委員として雇われ、働きましたか？
- m. 役所で役人として働きましたか？
- n. デモに参加したりデモを組織したりしましたか？
- o. テレビやラジオの番組や新聞、雑誌にインタビューされましたか？

調査の実施は、第2研究の対象者であった都内の14の精神障害回復者クラブに参加するメンバー104名を調査対象にした。有効調査対象数は、14グループ100名であった。

結果としては、日本語版 Empowerment 獲得評定尺度 (Empowerment スケール) の下位尺度ごとの内的整合性についての Chronbach の  $\alpha$  係数及び平行モデルによる信頼係数を算出した結果、個人レベルでは .815,.820, 組織レベルでは .853,.860, コミュニティレベルでは .649,.662, の数値を得た。この値は Segal, Silverman, Temkin (1995) の研究結果とも近似しており、コミュニティレベルを除いては、この尺度の信頼性は高いと見なすことが出来る。

第4研究においては、精神障害回復者クラブのメンバーが体験的に持っている Empowerment 能力感が、実際に Empowerment の獲得につながっているのか検討する。つまり、第2研究で開発された Empowerment 能力評定尺度の評定結果と第3研究で作成された日本語版 Empowerment 獲得評定尺度 (Empowerment スケール) の評定結果との関係を見た。対象メンバーは、男性74名、女性26名、計100名。平均年齢46.1歳 (SD=10.57)。平均参加期間6年11ヶ月 (SD=6.02)。グループの平均開催頻度、月3.07回 (SD=5.95)。メンバーの平均参加頻度、2.3回に1回 (SD=6.097)。全ての結果に、性差による影響はなかったので、その後の分析は、男女を合わせて行った。

グループ間の特性の違いを検討するため、新たに「グループに参加する際の評定のポイント」を設け、筆者がグループに参加観察する際の指標とした。項目は、17項目からなり5段階評定である。項目は主としてSHGsの持つEmpowerment能力評定尺度の中から、筆者が外部者として認定可能と思われる項目が採用された。なお、各項目は便宜上、それぞれ以下の様に命名した。

グループの規模—参加人数＝「規模」、

1. グループの緊張度がどのくらいか＝「緊張度」
2. グループの活気はどうか＝「活気」
3. 会話の頻度はどうか＝「会話頻度」
4. 体験が分かち合われているか＝「体験共有」
5. 情報の交換は十分か＝「情報交換」
6. 当事者側から見た、精神医療の現状の最新の情報が得られるか＝「医療情報」
7. 問題行動をコントロールすることについてのアドバイスが得られる＝「コントロール」
8. 具体的な対処の仕方が示され、日常生活の中での具体的な指針が得られる＝「対処方法」
9. 問題や悩みについて理解するための枠組みが得られる＝「枠組み」
10. 仲間の工夫を聞くことができる＝「工夫」
11. 誰にでもできない病気や薬、病院の話ができている＝「話」
12. 発言をすることが大事にされているか＝「発言保障」
13. 皆が耳を傾けているか、発言が遮られたりしていないか＝「傾聴姿勢」
14. 仲間として互いに尊重し合っている＝「尊重」
15. 発言者は偏っていないか＝「バランス」
16. 援助者役割は常に交替しているか（役割が固定化していないか）＝「役割交替」

その他の印象、感想

#### (1) SHGsの持つEmpowerment能力評定尺度と日本語版Empowerment獲得評定尺度との相関について

結果は、Empowerment能力評定尺度の評定結果と日本語版Empowerment獲得評定尺度(Empowermentスケール)との相関は.234で5%水準で有意な正の相関を示した。この結果は、SHGsのメンバーがEmpowerment能力感を持てば、実際にEmpowermentの獲得につながることを示している。このことはSHGsのEmpowerment機能を実証的に裏付けるものである。

#### (2) SHGsの持つEmpowerment能力評定尺度と日本語版Empowerment獲得評定尺度(個人、組織内、組織外)との相関について

さらにEmpowerment能力評定尺度は、日本語版Empowerment獲得評定尺度(Empowermentスケール)の下位尺度の組織レベルの尺度と正の相関(.230,5%水準で有意)が見られた。このことはSHGsが参加メンバーに組織レベルでのEmpowermentを獲得するための、つまり、コミュニ

ティ感覚の形成、メンバーの自己概念を引き上げる方法の提供、統制に役立つ新たなヒントを得る場の獲得、体験的知識の交換、モデリングの場、援助役割の獲得等の Empowerment を獲得するための場と機会を提供していることを証明している。

### (3) メンバーの SHGs 体験の過程とそれへの認知と Empowerment の関連性の検討

#### (3) - i. メンバーによるグループの重要度の評定と他項目との相関

メンバーによる SHGs の重要度の認定 (媒介変数) と、SHGs の持つ Empowerment 能力評定尺度の各項目の相関を見ることで、メンバーがグループのどの様な側面を重要視しているのか、どのようなニーズを求めてグループに参加しているのかをうかがい知ることができる。重要度と高い正の相関にあるのは、心傷受容、便宜受理、孤独解除、アドバイス、指針、工夫探知、近似、役割保障、勇気、会話、他者情報、心的支え、相互尊重、特殊テーマ、自信獲得、病理受容、偏見理解、邂逅といった項目である。いずれも、SHGs の重要な機能である。ソーシャル・サポート・ネットワーク、仲間集団としての SHGs の機能が浮き彫りになった。

#### (3) - ii. Empowerment 獲得評定尺度間の相関

個人レベルの Empowerment とグループレベルの Empowerment は、有意な正の相関を示した ( $r=.201, p<.05$ )。また、グループレベルの Empowerment とコミュニティレベルの Empowerment は、有意な正の相関を示した ( $r = .527, p<.01$ )。SHGs の活動が、組織外の活動場面での Empowerment の獲得、特にコミュニティレベルの Empowerment の獲得と強い関連のあることが明らかになった。また、以上のような相関を示した所から、今回採用した Empowerment 獲得評定尺度は、個人・グループ・コミュニティの間の Empowerment の展開に敏感に反応するスケールと考えてよさそうである。

#### (3) - iii. 援助役割の遂行と Empowerment の獲得との間の関連性

援助役割の遂行の項目と参加頻度は、負の相関を示し ( $r= -.284, p<.05$ )、個人レベルの Empowerment と  $r=.286$  ( $p<.01$ )、グループレベルの Empowerment と  $r=.515$  ( $p<.01$ )、コミュニティレベルの Empowerment とは  $r=.333$  ( $p<.01$ ) の正の相関をそれぞれ示した。

SHGs 内で援助役割を遂行することは、Empowerment の獲得の 3 つのレベルのそれぞれにプラスに影響する。このことは、Riessman (1965,1990) の主張した helper-therapy 原則を支持する結果である。なお、役割の遂行が参加頻度とマイナスの相関を示したことは、SHGs 内で役割の遂行が十分にでき、Empowerment の獲得が十分になされたメンバーにとっては、SHGs に頻繁に通う必要をあまり感じないのかも知れないという推察が成り立つ。また、そうした力のあるメンバーは、SHGs の中で援助役割を遂行する場面が多いとも言える。

また、この援助役割は、Empowerment 能力評定尺度一成分内での寄与率がかなり低いのも関わらず、このような重要な所見を示す項目であるところが、興味深い。

#### (3) - iv. 心傷受容とグループの重要度との関係

心の傷が受容できるようになったことと、メンバーにとっての SHGs の重要度は、正の相関を示した ( $r=.382, p<.01$ )。受け容れがたい病気の体験を自らの中に収めるのに SHGs は、重要な役割を

担っている。

### (3)－v. 指針、工夫探知、近似とグループの重要度との相関

SHGsの中で日常生活を送る上での具体的な指針が得られることと、仲間の工夫を知ることが助けになること、同じような体験を持つ者のグループであることに魅力を感じることは、それぞれグループに対する重要度と正の相関を示した ( $r=.367, r=.319, r=.412; p<.01$ )。このことは、体験的知識の交換の力、モデリング、イデオロギーの機能を裏付けるものである。

### (3)－vi. 役割の保障と組織内 Empowerment との関連性

SHGsの中で何らかの役割を果たす場面が保障されていることは、組織内 Empowerment と正の相関が認められた ( $r=.402, p<.01$ )。グループの中で役割を果たせる場が保障されていることは、組織内の Empowerment を構成する上で重要な要素である。

### (3)－vii. 病理の自覚と参加期間との相関

病気を自覚したことと参加期間との間には、正の相関が認められた ( $r=.207, p<.05$ )。ある程度の期間 SHGs に参加し続けることが、病気の体験を内的に位置づけるために必要である。あるいは、病気を自覚した人が SHGs に参加し続けると言えるのかもしれない。

### (3)－viii. 自信の獲得と参加期間、グループの重要度、組織内 Empowerment との相関

自分に自信がついてきたという項目は、参加期間、グループの重要度、組織内 Empowerment とそれぞれ  $r=.214^*, r=.311^{**}, r=.214^*$  ( $*: p<.05; **: p<.01$ ) という数値で正の相関が認められた。自信がついてきたメンバーは、ますます SHGs 内で関与の度合いを深め Empowerment を獲得し、より自信を深めるし、参加は持続し、グループを重要なものに位置づける。Empowerment の獲得に SHGs が貢献している側面が明らかになった。

### (3)－ix. 病理の受容とグループの重要度、個人・組織内 Empowerment との関連性

病理の受容とグループの重要度、個人・組織内 Empowerment は、それぞれ  $r=.244^*, r=.279^{**}, r=.259^{**}$  ( $*: p<.05; **: p<.01$ ) という数値で正の相関が認められた。病気の体験を受け容れることが色んな活動のパネになっているメンバーは、グループを重要なものと考え、個人・組織レベルでの Empowerment が高い。病気の体験がプラスの形で受け容れられるのに、SHGs は大きな力を発揮しているし、そうであることが個々のメンバーの Empowerment の獲得に貢献する。

### (3)－x. 互いに元気であることの確認とグループの重要度、個人レベルの Empowerment との関連性

互いに元気であることを確認しうれしくなるという項目は、グループの重要度、個人レベルの Empowerment とそれぞれ  $r=.209^*, r=.319^{**}$  ( $*: p<.05; **: p<.01$ ) という数値で正の相関が認められる。仲間の元気な姿に触れられるということが、Empowerment につながるというモデリングの機能が裏付けられた。そうした帰属集団として、SHGs は安定したコミュニティを構成しているのかも知れない。ここで得られた知見は、「つどい」(1996)の調査結果とも符合する。

### (3)－xi. 邂逅と個人レベルの Empowerment との関連性

信頼できる先輩や仲間と出会えたことが何よりの財産であるという項目は、個人レベルの Empowerment と正の相関が認められた ( $r=.232, p<.05$ )。これも先の SHGs のモデリングの機能が、

メンバーの Empowerment の獲得に貢献し得るという文脈の中で理解できる。

### その他

「生きる方向を考える基礎となる人間関係が得られた」(第 12 項目)と、「当事者側から見た精神医療の現状の最新の情報が得られる」(第 13 項目)については、どの項目とも相関が認められなかった。この背景には「生きる方向を考える」という表現がかなりの重みをもって受けとめられたのではないかということと、「当事者側から見た」という意味合いが十分に共有され得なかったのではないかということが考えられる。尺度の精製ということを考慮に入れると、新たに質問項目を練り直し追試を行うか、あるいは、除外してもいい項目なのかも知れない。

### 評定研究の考察とまとめ

#### (1) SHGs の Empowerment 能力が実証的に検証された

今回の評定研究の結果から、今回開発した SHGs の Empowerment 能力評定尺度と、Empowerment 獲得評定尺度との間には、有意な正の相関が認められた。この結果は、SHGs には、メンバーの Empowerment の獲得を支援する能力(組織レベルでの Empowerment)があることを裏付けるものである。このことを実証的に検証した研究は、私の見聞する限り、1999 年時点で、世界で最初のものである。

#### (2) SHGs のソーシャル・サポート・システムとしての側面が浮かび上がった

媒介変数として設定した、メンバーによる SHGs の重要度の認定と、SHGs の持つ Empowerment 能力評定尺度の各項目との相関を見ることで、メンバーがグループのどのような側面を重視しているのか、どんなニーズを求めてグループに参加しているかが明らかになった。グループの重要度と高い正の相関にあるのは、心傷受容、便宜受理、孤独解除、アドバイス、指針、工夫探知、近似、役割保障、勇気、会話、他者情報、心的支え、相互尊重、特殊テーマ、自信獲得、病理受容、偏見理解、邂逅といった項目である。いずれも、SHGs の重要な機能である。ソーシャル・サポート・ネットワーク、仲間集団としての SHGs の機能が浮き彫りになった。

#### (3) Empowerment を構成するための SHGs の要件が浮き彫りにされた

グループ間の比較検討の結果と事例的検討を付け合わせた結果、Empowerment を構成するための SHGs の要件が明らかにされた。この点については、次の事例的検討の中で詳しく論じることにする。

## 3. 事例研究

なお、事例研究の詳細な記述に関しては、紙幅の都合もあり、別の機会に論じることにする。事

例的検討と、評定研究との付け合わせの結果明らかになった結論のみを、ここでは取り扱うことにする。

### (1) 日本における精神障害回復者クラブの実際

調査対象となった14の精神障害回復者クラブについて事例研究を行い、さらに、評定研究のグループ間比較検討を行った。次いで、第2研究で行った調査結果と事例研究から得られる質的情報を併せて、Empowermentが獲得されるためのSHGsが持つべき条件が何か検討した。

その結果、SHGsが持つべき条件として、①メンバーがSHGsを重要な活動と認識し、自分の所属集団として感じられるような設定にあるか、即ち、メンバーが十分に運営に参加し、コミットメントできる構造にあるかどうか、②体験を語ることが十分に認められるような構造やプログラムになっているかどうか、③問題を前向きに考える勇気の湧くようなモデルが豊富にいるかどうか、④誰にでも話せない病気や薬、病院の話をすることで支えられているかどうか、といった条件が浮き彫りにされた。

### (2) 日本でSHGsが展開していくことの難しさ・障害

今回、評定研究をするに当たって様々なSHGsと直接接触する機会を得た。その体験から、日本におけるSHGsの展開を阻んでいると考えられる幾つかの要素が明らかとなった。

#### (2) - i. 活動・運動の側面から

運動の展開を阻んでいることの一つは、個々のSHGsのイデオロギーが、グループ相互の対話や交流を阻んでいる側面である。イデオロギーの対立が運動の展開を阻んでいる側面は否定できない。一方では、サービス・システムの再編や専門職の役割変更、構造的変革を求める運動の展開のための条件を明確にしていく必要がある。従来、特に日本では、この運動論の整備が不十分である。

#### (2) - ii. 支援・援助体制の面から

筆者は、専門職の関与はかなり限定的なものにすることが、SHGs、専門職双方にとって大事な点だと考えている。今回の調査でも、PSW（精神科ソーシャル・ワーカー）の関与しているSHGsで、「グループの重要度」と「体験を語ることが認められている」という項目で、有意に低い評点がされており、SHGsに専門職が関与することによるマイナス面の検討が厳しくされる必要がある。欧米では専門職がSHGsに関与することによるマイナス面の検討が厳しくされている。さもないと、グループが行政の下請けや専門職の補助的治療機関として利用される危険性がある（三島,1997b;1998b）。

#### (2) - iii. 社会や地域の受け入れ体制の問題から

Empowerment獲得評定の尺度は、米国では仕事を持つことと、組織外の対社会的場面でのEmpowermentの獲得との間に相関が見られるが、今回の日本の調査では、ほとんどのメンバーが組織外のEmpowermentの評点が低かった。当事者が自らの問題に関わる委員会や審議会、協議会へ参加することが、日本ではまだまだ保障されていない状況にある。



ただし、そんな中でも、0.「テレビやラジオの番組や新聞、雑誌にインタビューされましたか？」という項目には、「はい」と答えるメンバーも多く、こうした活動が注目を浴びる時代の趨勢にあることに間違いはない。

## 全体の考察と展望

本研究から、筆者は、新たな研究と実践の展望を得た。

第1には、Empowerment の評定尺度を整えたことで、コミュニティ心理学独自の Empowerment アプローチの可能性が開けたことである。データ・ベイスド・インターベンションを含んだコンサルテーションが、SHGs に対して展開できる可能性が開けたことである。SHGs とそのメンバーがより Empowerment を獲得していけるために客観的データを提示しながら話し合い、側面から専門的に支援していく道である。

第2には、主成分分析の結果より、Empowerment 能力評定尺度は次元性の高い尺度であることが分かったが、Empowerment 能力を構成する要素が抽出される可能性が残されている。筆者もバリマックス回転の結果、いくつかの意味のある因子を抽出している。更なる研究によって、SHGs の Empowerment 能力を構成する要素を追求することで、理論研究にも大きな貢献をすることになる。

第3として、今回の評定研究の結果は、専門職の在り方にも再考を促すものであった。即ち、精神科ソーシャル・ワーカー（PSW）が関与している精神障害回復者クラブでは、クラブの重要度に対する評点と、体験が分かち合われているという評点が有意に低かった。このことは、専門職が関与することのマイナスの側面を示唆しているもので、従来の専門職中心の専門性の在り方に再考を促すものである。

最後に、この SHGs の Empowerment 機能の評定研究を通して筆者が感じたことは、当事者（被援助者）をクライアントとして見るのではなく、援助資源として見る見方が主流を成すのではないかということである。このことは、相互支援をベースとした人々の力と尊厳に基づく新たな文化の創造に貢献するもので、こうした潮流の中で、従来の専門職中心の専門性の在り方は、変更を求められざるを得ないのであり、当事者（被援助者）の生の体験世界の流れを尊重し、彼らの Empowerment の実現が保障されるような専門職の関与の仕方、そうした意味での役割の変更、ヒューマン・サービス・システムの再編が求められている。それは、従来の専門性を捨て、当事者（被援助者）との真の意味でのパートナーシップを基盤に、新たな専門性を構成していく営みの中からしか実現され得ない、と筆者は考えている。

## 文献

Borkman, T. (1976) Experiential knowledge: A New Concept for the Analysis of Self-Help Groups. *Social Service Review*, 50 (3), 445-456.

Dodd, P., & Gutierrez, L. (1990) Preparing students for the future: A power perspective on community practice. *Administration in Social Work*, 14 (2), 63-77.

Katz, A.H. & Bender, E.I. (1976) Self-Help Groups in Western Society and Prospects. *The Journal of Applied Behavioral*

*Science*, 12 (3), 265-282.

三島一郎(1997a) セルフ・ヘルプ・グループの機能と役割—その可能性と限界. *コミュニティ心理学研究*, 1 (1), 82-93.

三島一郎(1997b) セルフ・ヘルプ・グループと外的システムとの間の連関・連携についての検討. *日本社会事業大学研究紀要*第43集, 59-70.

三島一郎(1998a) 第3章 セルフヘルプ・グループの機能と役割. 久保紘章・石川到覚編『セルフヘルプ・グループの理論と展開』中央法規, 39-56.

三島一郎(1998b) セルフ・ヘルプ・グループと専門職との関りについての検討. *コミュニティ心理学研究* 2 (1), 36-43.

三島一郎(1999) セルフ・ヘルプ・グループの Empowerment 機能に関する研究—精神障害回復者クラブとそのメンバーの Empowerment に関する評定研究. 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士学位論文.

岡知史(1988) セルフ・ヘルプ・グループの働きと活動の意味. *看護技術*, 34 (15), 12-16.

Riessman, F. (1965) "The "Helper" Therapy Principle". *Social Work*, 10, 27-32.

Riessman, F. (1990) "Restructuring Help: A Human Services Paradigm for the 1990s", *American Journal of Community Psychology*, 18 (2), 221-230.

Segal, S.P., Silverman, C. & Temkin, T. (1993) Empowerment and Self-help Agency Practice for People with Mental Disabilities. *Social Work*, 38 (6), 705-712.

Segal, S.P., Silverman, C. & Temkin, T. (1995) Measuring empowerment in client-run self-help agencies. *Community Mental Health Journal*, 31 (3), 215-227.

「つどい」200回記念誌編集委員会(1997) セルフ・ヘルプ・グループ「つどい」200回記念誌「出会いの中で」第3号—セルフ・ヘルプ・グループ「つどい」の果たしてきた役割と意味(アンケート調査を通じて)—財団法人 日本社会福祉弘済会研究助成事業.

Zimmerman, M.A. (1985a) Empowerment, Perceived Control, and Citizen Participation : A Dissertation Proposal. Submitted to the University of Illinois Psychology Department, September.

Zimmerman, M.A. (1985b) Empowerment Theory, Research, and Application. *American Journal of Community Psychology*, 23 (5), 569-579.